林業樹種雑感

その３　ラジアタパイン

林野庁研究指導課　嶋　瀬　拓　也

■はじめに

第３回の今回は，ラジアタパインを取り上げる。外材ばかりで恐縮だが，次回と，おそらくその次も外材である。なぜこうも立て続けに外材かというと，国産材や国内林業・木材産業のことを考える上で，外材や海外林業・木材産業の知識が不可欠だからである。

中でも，北洋材→ラジアタパイン→ベイマツ（次回予定）は，この順に，続けて取り上げたい。それは第１に，これらの樹種・材種を専門とする製材業がいずれも，国内のごく限られた地域に，極端に集中しているためである。第２に，その集中のしかたに，ちょうどこの順に並べたくなるような特徴があるためである。そして第３に，各樹種がいずれも，それぞれの性格の違いに応じて，我が国の製材品市場の異なる部分を受け持ってきたという共通点を持つためである。

北洋材製材は，専門量産工場としてはやや小ぶりの工場が，多数集積する形で発達した。ベイマツ製材は，国内生産の多くを１つの企業が占めている。そして，ラジアタパイン製材は，ちょうどその中間的な形態，すなわち，１つのガリバー企業と２つの産地が同じ市場を巡って競争を繰り広げてきた。

主な生産品目が梱包材であることも，ラジアタパイン製材を特徴づける重要なポイントである。そして，この点において，北海道とも深い関わりがある。

実は，これらのことはどれも，私の研究の核心に当たる。林業経済学という極めてニッチな分野の研究者が，何に注目し，何を明らかにしようとしているのか，その一端をお話ししてみたい。

■「ラジアタパイン＝梱包材」という図式の成立

ラジアタパイン（標準和名：モントレーマツ）は，もともと米国カリフォルニア州の原産だが，「ニュージーランドまつ」とも称されるほど，同国産が有名である（**写真１～４**）。

実質的にほぼ同義の「ニュージーランド材」は，いわゆる四大外材の１つである。四大外材とは，外材のうち，我が国にとって特に重要であった材種を一括りにした古い呼び名で，南洋材（≒ラワン材）・米材・北洋材・ニュージーランド材の４つをいう。

ニュージーランド材は，この中では最も新しく，つまり歴史が浅い。しかも，他の３材種が（我が国の製材品市場では比較的高い価格帯に位置する）建築用材を中心としていたのに対し，ニュージーランド材だけは違った。前評判からすでに「材質上の理由のため，

写真１　ラジアタパイン人工林の伐採現場（タウランガ市周辺，2009年，道中哲也氏撮影＝写真１～４）

写真２　グラップルスキッダによる全木集材（ネルソン市周辺）

建築用材としての利用は難しい」との見方が大勢を占めていたが，実際に丸太の輸入が始まると，その前評判どおり，梱包材としての利用が目立った。時代が下るとその傾向はますます強まり，「ラジアタパイン＝梱包材」という評価が定着していった。

すなわち，わざわざ輸入してまで使うにもかかわらず，当初から（低い価格帯の製品である）梱包材としての利用が前提だった。外材の中でも異色の存在といってよいだろう。

もっとも，ニュージーランド国内では，建築用材をはじめ，幅広い用途に使われている。このように，現地では問題なく使えているものが，日本では使えないと判断され，実際に使われない。決して珍しいことではないが，なぜこのようなことが起こるのかを考えることは，我が国の木材需要を理解し，売り方を考える上で，不可欠の作業である。

写真３　丸太を積んだトレーラー（ネルソン市周辺）

写真４　枝打ちされた幼齢林（タウランガ市周辺）

■ラジアタパイン製材の空間構造（≒立地状況）

北洋材製材が，生産内容の面では小割材への特化を伴いつつ，地理的な面では特定の地域に集中していったのと同様，ラジアタパイン製材も，梱包材への特化を伴いながら，特定地域に集中していった。丸太調達の便がよい地域に生産が集中した点でも，まったく同じである。

しかし，明らかに異なる点があった。生産が集中した地域の数である。北洋材製材では，時代が下るにつれて富山県への一極集中が進んだが，ラジアタパイン製材では，少なくとも2010年代初頭まで，西日本の３地域がそれぞれ勢力を保った。このことについて少し詳しくみておきたい。

ラジアタパイン製材は，1970年代半ばまでに尾道糸崎港松永港区（広島県福山市）と須崎港（高知県須崎市）への集積が進み（**写真５**），その後，1990年から2008年にかけては三河港豊橋港区（愛知県豊橋市），2009年から2013年にかけては姫路港飾磨港区（兵庫県姫路市）に，先の２地域に肩を並べる規模の生産拠点があった。

これらの地域を「産地」と呼ばなかったのには理由がある。前２者（松永・須崎）をそう呼ぶことに異存はない。地域内に，資本系列を異にする複数の工場が立地していたからである。しかし後２者（豊橋・飾磨）については，製材用ニュージーランド材素材入荷

写真５　須崎港に停泊中の丸太輸送船
（2010年，天野智将氏撮影）

量で愛知・兵庫両県が都道府県別トップ３の位置にあった時期と，㈱オービス（広島県福山市＝本社）の工場がその２県で操業していた時期とが完全に一致する。すなわち，愛知県や兵庫県がトップ３の一角を占めていたのは，その時期に，１産地に匹敵する規模の工場が県内に１つあったためということになる。これを「産地」と呼ぶことには，少し抵抗があった。

ともあれ，1970年代半ばまでに成立していた西日本太平洋側の２産地（松永・須崎）に加え，1990年代以降，これらの産地に肩を並べる規模の生産拠点が，やはり西日本の太平洋側にあり，３地域で国内生産の大部分を占めるという構造が完成した。

松永・須崎・豊橋・飾磨の４か所がいずれも太平洋側であるのは，いうまでもなく，原木調達上の優位性によるものだろう。北洋材で原木１立米当たり数ドルの違いが問題となるとき，ニュージーランド材でそれが問題にならないはずがない。

しかし，なぜ３か所も同時に存続しえたかのか。そして，なぜそれらはすべて西日本であったのか。

答えの１つは，ここまでしつこく述べてきた，「梱包材は低い価格帯の製品である」ということ，そしてもう１つは，北海道の存在にあるものと思われた。

１つめの点からみる。嵩（かさ）や重量の割に安価な梱包材は，長距離輸送には向かない。このため，出荷圏はおのずと限られる。松永や須崎からみて，大阪圏は射程圏内でも，名古屋圏は厳しいだろう。その名古屋圏には，自動車産業をはじめ輸出産業が高度に発達しており，梱包材需要も当然に大きい。これが名古屋圏に工場が建設された理由だとみている。

ところで，製品の輸送費がそれほど大きな問題なら，いっそのこと，大阪港や名古屋港に工場を置いてはどうかとは思われないだろうか。きちんと裏を取ったわけではないが，この点については，次のように考えている。すなわち，大都市中心部は，輸送費が低く抑えられる反面，地代や人件費が高い。このため，土地１坪当たり，労働者１人当たりの稼ぎがよほどいい産業でないと，立地することは難しい。原木・製品の輸送費と地代・人件費の兼ね合い，現実的な用地取得のあてなど，さまざまな条件が加味された結果，大都市圏中心部からは少し離れた地方港に白羽の矢が立ったのではないだろうか。

さらにいえば，そもそもなぜ，ラジアタパイン梱包材製材は，国内最大の消費地である東京圏に生産拠点を置かなかったのか。そこで浮上してくるのが２つめの点，すなわち，北海道の存在である。

周知のとおり，本道のカラマツ製材は，梱包材を主力としている。そして，その最大の仕向先は東京圏である。安価なカラマツ小径材を使い，量産による低コスト化を追求した本道の梱包材製材は，東京圏からは遠く離れていながら，そこで他を寄せ付けない競争力を有する。このように，本道のカラマツ梱包材製材の存在が，ラジアタパイン梱包材製材の東進を阻んできたのではないかとみている。

■おわりに

昨今の外材業界の例に漏れず，ラジアタパイン梱包材製材にも，丸太価格の高騰に起因する再編が生じている。それは，ごくかいつまんでいうと，強度がそれほど必要とされない品目が，スギやトドマツに置き換わりつつあるということである。このことをして，「スギは世界で一番安い木材になってしまった」と自嘲気味に語る声を耳にする。しかし，私はそうみるより，「製紙原料材と一般製材用材との間にグレードが１つ増えた」とみたほうがいいと思う。もちろん，他の樹種に取って代わられた分，ラジアタパインや道産カラマツの需要は減る。しかし，減ったのは，そもそもこれらの樹種でなくてもよい部分である。さまざまな樹種・サイズ・材質の木材が，それぞれにもっともふさわしい役割を与えられることは，人間社会が森林から享受する利益を最大化する上で不可欠のことである。そして，そんな大げさな話を持ち出さなくても，利用する樹種の特徴を生かした産地や企業だけが存続し，発展してきたことは，歴史が証明している。

ラジアタパインの研究を通じて学んだことは，まだたくさんある。しかし，すべてを盛り込むには，すでに内容も分量も大きくなり過ぎた。機を改めたい。ただ，外材の使われ方には，「欲しがられる木材とはどのようなもので，それはどういう用途に，どんな理由で求められているのか」という，国産材業界がもっとも知りたいはずの問いへの答えが詰まっている。外材や海外林業・木材産業を知ることは，国産材や国内林業・木材産業が置かれている状況，進むべき方向を知ることでもある。このことだけは，改めて訴えておきたい。